

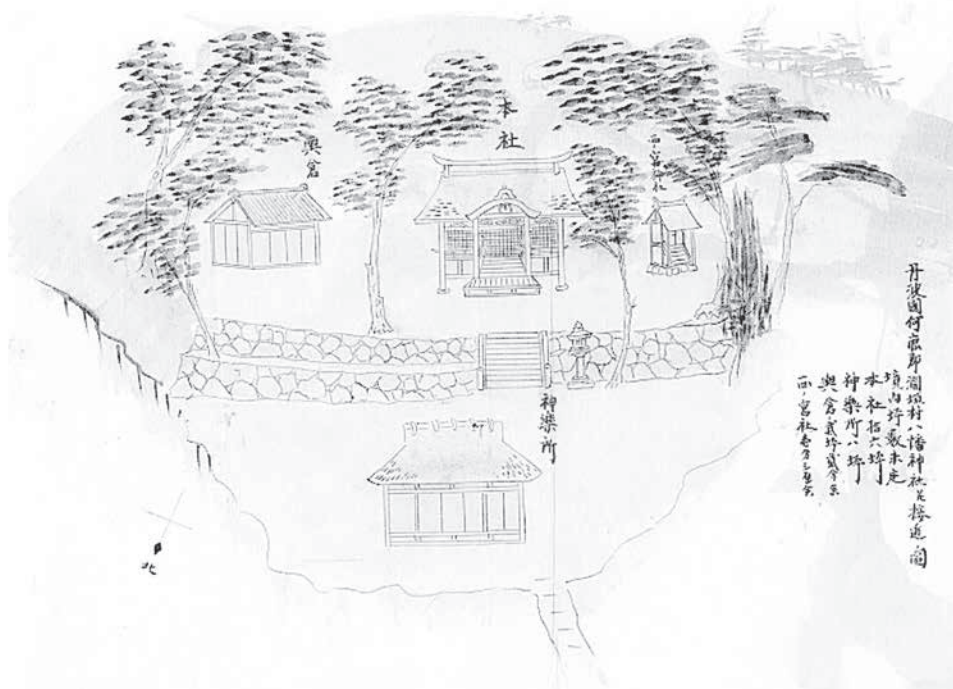
仁木頼章と淵垣八幡神社

小山 雅人

1. はじめに

鎌倉幕府の滅亡からちょうど10年目の康永2年6月11日（グレゴリオ暦：1343年7月11日）、従五位上伊賀守兼兵部大輔源朝臣頼章（丹波守護仁木頼章）、は、丹波国何鹿郡八田郷下村（現在の京都府綾部市淵垣町）に八幡神社を造営した。このことは当社蔵の「康永二年棟札」によって知られる。

およそ400年を経た元文4年（1739、八代將軍吉宗の晩年）、当淵垣村の氏子たちが傷んだ部材を取替え再建した。これも同じく当社所蔵の「元文四年棟札」に明記されている。康永以来、一度も火災に遭わず、一度解体修理が行われただけで、現在に至っていること



第1図 明治17年の淵垣八幡神社

が、棟板のみならず再建時に再利用された部材の様式の検討からも証明^(注1)されている。

明治15年(1882)11月に内務卿名で京都府知事に命ぜられた72件の社寺調査の報告書『四百年前社寺建物取調書』の67番目に京都府丹波國何鹿郡淵垣村字奥ノ谷第三十五番地 村社 八幡神社とあり、明治17年2月23日付けで概要が報告されている。興味深いのは、正面図・側面図とともに、社殿など境内の多色の写生画が添えられ、今はトタン屋根に覆われている本来の柿葺きの屋根と正面の唐破風が描かれ、堂々とした三間社の姿が見られることである。^(注2)(第1図・第2図)

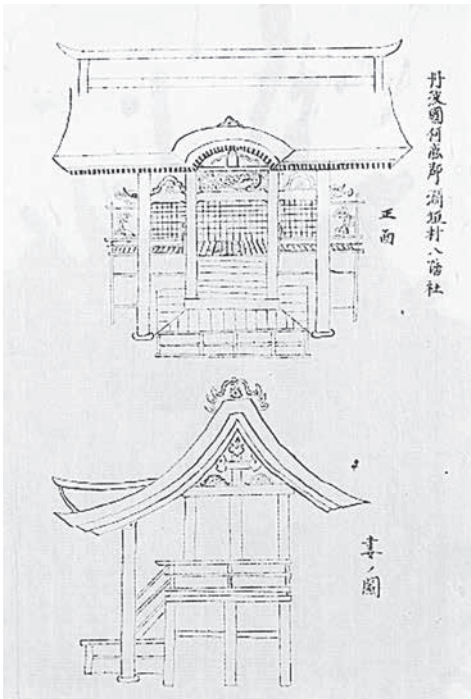
昭和51年(1976)には『綾部市史』上巻が上梓され、第六章「中世の文化」の第四節として「淵垣八幡神社と中世の神社建築」と題して、当神社のことが5頁に亘って詳述された。建築学的な詳細、特に様式や解体・再建の内容については、本稿では手に余るので、この『市史』に当たっていただきたい。この神社が三間社であることと、禪宗様の混入が特に注意されるという。

昭和61年(1986)4月16日、当社は第4回京都府指定、登録文化財及び文化財環境保全地区のひとつとして、「京都府登録文化財八幡神社本殿(室町時代)」^(注3)となった。『綾部市史』で「仁木頼章がこの造営を行った意図は明らかではない」と述べられ、登録時の図録『京都の文化財』第4集でも「創立・沿革は詳らかでない」とされたが、本稿は、淵垣八幡神社の歴史的な背景を探り、造営の目的・意義を明らかにしようとするものである。

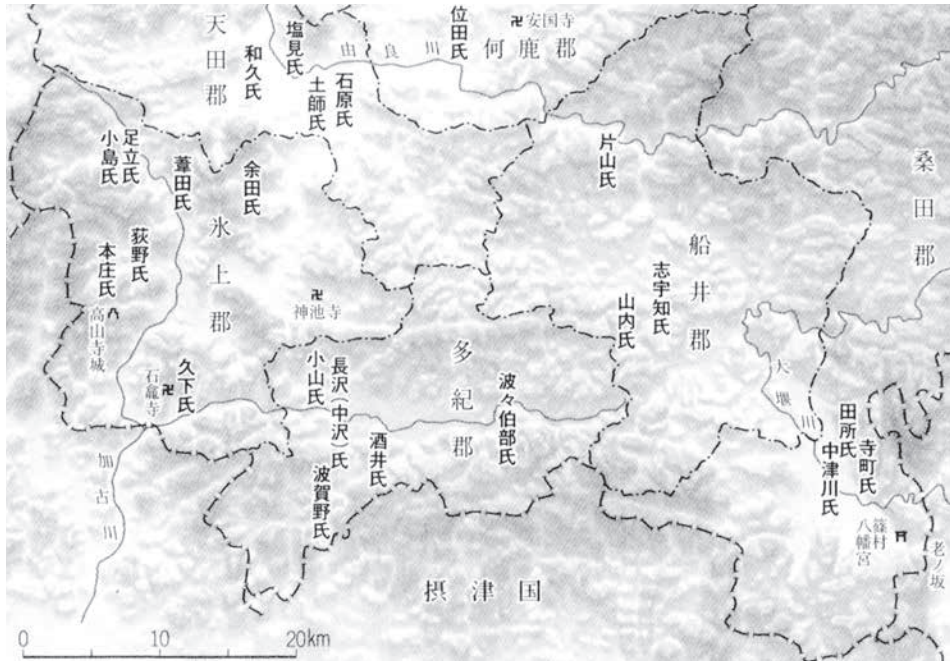
2. 丹波の武士団

仁木頼章は、正安元年(1299)の生まれで、嘉元3年(1305)生まれの足利高氏(尊氏)よりも6歳年長である。以下、旗揚げから足利幕府成立前後までの時代背景を、仁木頼章と丹波の武士団を中心に見ていこう。^(注4)

鎌倉時代末期の元弘3年(1333)3月、幕府の重要な御家人足利高氏は、幕府の命を受



第2図 淵垣八幡神社正面・側面図



第3図 元弘3年頃の丹波土豪分布図(拠「亀岡市史」)

け、後醍醐天皇の倒幕計画に呼応し京畿各地の反乱を討伐するため、弟直義とともに鎌倉を出て京都に向かった。この時、仁木頼章も吉良・上杉・細川・今川などの宿将とともに供奉している。時に高氏29歳、頼章35歳である。京都に着いた高氏はともに鎌倉から出陣した名越高家の討ち死ににもかかわらず、そのまま丹波に入り、4月29日、篠村八幡宮(亀岡市)で倒幕の旗揚げをした。『太平記』によるとこの時、高氏のもとには、氷上郡の久下、芦田、余田、多紀郡の長沢、酒井、波賀野、小山、波々伯部、船井郡の志宇知、山内などの諸氏が馳せ参じた。『太平記』には見えないが、船井郡和智荘の片山氏や桑田郡国分寺の寺町氏も馳せ参じたと考えられる(第3図)^(注5)。また、何鹿郡八田郷では建武元年(1334)に七百石高城城主の大槻備中守が淵垣に「大應山妙徳寺」を建立している^(注6)。倒幕の時、足利方について何らかの手柄をたてた褒賞だったのではないであろうか。

また、同じ丹波の武士団でも、氷上郡の荻野朝忠は足立三郎とともに既に3月に千種忠顕を総帥とする六波羅探題攻撃軍に加わっていたが、今回は氷上郡の足立、小島、本庄、何鹿郡の位田、そして和田、平庄(居住地不詳)などの武士とともに「今更、人の風下に立てるか」と、若狭経由の別行動をとって倒幕に参加した。こうして丹波の武士団は、鎌倉幕府の六波羅探題を滅ぼした戦いに参加し、「建武の中興」に立ち会ったのである。

高氏は勲功第一として、後醍醐天皇から「尊」の字をもらって「尊氏」と名乗るようになった。しかし新政権ができた2年後の建武2年、今度はあまりに公家中心の後醍醐天皇

の政権に不満を持つ武士たちを率いて弟足利直義とともに、北条の残党の反乱（中先代の乱）に乗じて行動を起こす。仁木太郎頼章と舎弟二郎義長はこの時も尊氏に随従し、奮戦している。建武3年（1336）1月、新田義貞を追撃して一度は入京したが、2月には足利勢は北畠顕家のために一敗地にまみれ、九州にまで落ちのびることになる。なお、この2月には仁木頼章と上杉朝定の両名が丹波守護として在任しており、仁木が桑田・船井・多紀・氷上の4郡、上杉が何鹿・天田の2郡を分割支配していたと推定されている。

丹波の武士団は、仁木頼章に率いられていた。この時、弟の仁木義長は尊氏に直接従って九州まで行ったのに対し、兄の丹波守護頼章は丹波・摂津および周辺の武士団をまとめ、氷上郡の高山寺の城に立て籠もり、播磨の赤松氏と連携して後醍醐軍の阻止にあたった。2月3日には丹波和智の片山一族へ軍勢の催促をしている^(注7)。

5月、九州から捲土重来してきた尊氏軍に合流し、湊川の合戦で楠木正成・新田義貞に勝利する（5月25日）。先に頼章に催促された和智荘の片山忠親は、これに応じて奮戦したらしく、6月と8月に軍功を丹波守護の仁木伊賀守頼章に上申している。同年10月に頼章は、丹波・美作の勢千余騎を率いて新田義貞の籠もる越前金崎城に向かう。11月には「建武式目」が制定され、ここに実質的に「足利幕府」が成立した。

桑田郡出雲荘の田所弁海は、湊川の合戦後に比叡山へ敗走した南朝方の軍勢に加わっていた。建武4年5月には高山寺は南朝に占領されていたらしく、派遣された新田行義が、氷上郡の足立氏や本庄氏らを集め高山寺城に拠ったという。この頃天田郡の和久・石原・土師・塩見の諸氏も南朝方で、由良川筋をめぐって南朝北朝の激しい攻防があった^(注8)。

3. 尊氏と丹波

旗揚げの地が丹波の篠八幡宮であったこと、丹波各地の武士が馳せ参じたこと、倒幕後に何鹿郡の安国寺や岩王寺に寄進し、高城山の大槻氏が寺院を建立していること、その後も都で苦境に陥ると丹波に入り、摂津や播磨に逃げるのを常としていたこと、これらは丹波に足利氏の所領が多くあったことと無関係ではないであろう。鎌倉時代後期の「倉持文書」には、桑田郡の太田郷、何鹿郡の八田郷・漢部郷が挙げられ、丹後にも宮津などに所領があったことが分かる^(注9)。八田郷には上杉氏の本貫地上杉荘があった。尊氏の母上杉清子の故郷である。諸国の安国寺の筆頭とされる丹波安国寺は、現在の綾部市安国寺町にあるが、清子は安国寺で尊氏を生んだという伝承がある。

最近の尊氏の家族に関する清水克行氏の研究によると、尊氏が生まれた時、父足利貞氏は33歳、足利家の家女房であった母清子は3歳年上の36歳であった^(注10)。鎌倉幕府初期に足利義兼が北条時政の娘を娶って以来、足利家は代々北条氏から正室を迎えることになっ

ていたことはよく知られている。代々の足利家の当主は一人の例外を除いて、全て母親は北条氏であった。貞氏にも元服した頃に迎えた北条顕時の娘との間に高義という嫡男がいた。高義は正和3年(1315)に「足利左馬助」名で文書を発行している。父貞氏はこの時まだ43歳であったが、既に出家しており、家督も高義に譲られていたらしい。その高氏の異母兄が文保元年(1317)6月にわずか21歳で急死するのである^(註11)。この時、嫡男高義に家督を譲り隠居していた父貞氏が再び足利家の当主に復帰する。高氏も元応元年(1319)に15歳で元服するが、娶った妻は家来筋の加子氏の娘であった。父貞氏には高氏に家督を譲る気はなく、ひたすら長男高義の忘れ形見である二人の孫息子の成長を待っていたようである。元服はしたものの高氏は10年以上日陰者で、足利家の当主名で発行される文書の署名の研究から、足利家を継いだのは父が元徳3年(1331)9月に亡くなった後であったことが判明する。上杉重房の娘の子家時以来、非北条氏で上杉氏の母を持つ二人目の足利家当主の誕生であった。高氏26歳、実に篠村八幡宮での挙兵のわずか2年前であった。

このように、足利尊氏は清和源氏の嫡流で、若い時から平氏である北条執権家から天下を奪い返そうと決意していたという歴史小説によく見られる設定は考えにくいのである。むしろ足利家の家女房の母が実家の上杉荘で産み落とした後、兄の急死後、鎌倉に呼び返されて元服するまで、弟直義と丹波の山野を走り回っていたという推測の方が自然である。尊氏丹波生誕説は、国文学の岡見正雄氏、歴史学の網野善彦氏らに支持され、尊氏の父母の年齢などを考証した清水氏も支持に傾いているような書きぶりである。

4. 仁木頼章の地位

仁木氏は足利氏流の清和源氏で、一般に概説書などでは、早くに足利家から分家しており、一族の中で仁木氏の身分は軽かったとされるが、頼章・義長兄弟の5代前の仁木実国は細川氏の祖義季の兄である。『太平記』では足利の家来衆を列举する際、初期は

吉良・上杉・仁木・細川・今川・荒川(巻第九)

吉良・石堂・仁木・細川・今川・荒川・高・上杉(巻第九)

仁木・細川の人々(巻第十三)

仁木・細川・高・上杉(巻第二十七)

などと並べ、観応の擾乱で上杉氏・高氏が没落すると、

仁木・細川・土岐・佐々木(巻第二十七)

仁木・細川の人々(巻第三十一、三十三)

仁木・細川・土岐・佐々木・佐竹・武田・小笠原相集まって(巻第三十三)

と書いている。仁木氏も幕府の重鎮のような書き方で、特に「仁木・細川」は決まり文句

のようである。これには早くから丹波国等の守護に任命され、観応2年（1351）の高師直一族の没落の後は執事を務めたこともあるであろう。足利家・幕府の執事・管領を務めた家柄という点で「仁木・細川」と並び称された時期もあったということであろう。

丹波守護には3度就任している。最初は建武3年（1336）から康永2年（1342）に丹波守護代荻野朝忠が南朝に走ったときの引責辞任までで後任は山名時氏。2回目は山名時氏が直義に従った観応2年である。直義方の桃井直常が京都を攻め、尊氏・義詮親子は丹波に逃げ、氷上郡の久下氏を頼った。この時、荻野朝忠が駆けつけ、多紀郡の波々伯部為光や長沢佐綱とともに義詮を守ったので、朝忠も再び守護代になった。頼章は幕府の執事と武蔵守にも就任し、仁木一族は9カ国の守護となり、最盛期を迎えた。3度目は文和3年（1354）8月である。4年後の延文3年（1358）、尊氏が54歳で没した時、頼章は全ての職を辞し、出家して道璟と名乗った。そして翌年の秋10月13日、61歳で死んだ。

丹波守護や執事への就任は、拳兵以来、丹波や摂津の武士団をまとめた力量が買われたとも見られるが、頼章は高師直などと違い、決して軍事的に優れた武将ではなかった。『太平記』には武勲の場面は殆どなく、貞和5年（1348）の四條畷の戦い（巻二十六）でも、文和4年（1355）1月に山名勢七千騎の丹波通過を見逃した時（巻三十二）も、同年3月に直冬軍が敗走した戦でも「時の管領仁木左京太夫頼章は一度も桂川より東へうち超えず」（巻三十三）などと意気地がなく、無様な様子ばかりが描写されているようである。わずかに文和元年（1352）閏2月の仁木一族が新田義興・義治を追う場面（巻三十一）で仁木勢の活躍が描かれている。

上述の建武3年にしても、丹波の武士団を率いて尊氏が九州から戻ってくるまで敵を食いとめる、鎌倉か三河から来たばかりとすれば仁木頼章にそれが出来たであろうか。しかも弟義長は尊氏に従って九州で奮戦中である。同じ役割で播磨の武士をまとめていた赤松氏は古来、地元播磨の土豪である。頼章ももともと丹波と何らかの関係があったのではないか。想像であるが、父か叔父かが足利家の所領である丹波八田郷の管理のために現地にいたとか、頼章の母が高氏の乳母であったとか、何か特別な事情があったように思われる。母の実家の上杉氏ですら尊氏の敵になる時代である。戦上手でもないのに丹波守護・執事になり、終生尊氏から離れることのなかった頼章は、少年時代から尊氏と特別な繋がりがあったように思えてならない。

5. 淵垣八幡神社造営の契機

康永2年（1343）6月11日に丹波守護仁木頼章が丹波国何鹿郡八田郷に淵垣八幡神社を造営した。まず、康永2年という時点の背景を見ておきたい。建武3年、光厳天皇を奉

じて入京した時から始まった南北朝時代であるが、すでに暦応元年（1338）、5月に北畠顕家、閏7月に新田義貞が敗死し、8月には足利尊氏がようやく征夷大將軍に任ぜられ、翌暦応2年（1339）8月、後醍醐帝が崩御された頃に内乱も一段落を迎えている。その後、観応元年（1350）に幕府内部の紛争「観応の擾乱」が始まるまでの十年余、この時代には珍しく比較的平穏な時期が訪れたのである。森茂暁氏は近著『足利直義』で、この建武5年（1338）8月に始まり、貞和5年（1349）9月の直義失脚で終わる暦応・康永・貞和年間を尊氏・直義の「二頭政治の時代」と評価している^(注12)。

それは初期足利幕府の文化的事業が相次いだ時期でもあった。等持寺（1341年）に続いて別院北等持寺（後の等持院）の建立（1343年）、天龍寺船の元への派遣（1342～43年）、その献納金等を財源とする後醍醐天皇の菩提を弔う天龍寺の造営（1345年）が行われた。建武4年（1337）ごろから始まっていた全国66カ国に寺と塔を建てる事業も、貞和元年（1345）に安国寺・利生塔という名称が決定した。この事業は元弘以来の敵味方を問わない戦没者の鎮魂を目的としているが、源頼朝も保元の乱以来の敵味方共に供養を行っており、中世に一般的な怨親平等思想である。尊氏・直義兄弟に縁の深い丹波安国寺は、全国安国寺の筆頭とされた。さらに康永元年（1342）には五山十刹の制度が定められ、丹波の安国寺も十刹のひとつになった。また、足利直義が願文とともに兄尊氏像（国宝伝平重盛像）と自分の像（国宝伝源頼朝像）を神護寺に奉納、安置したのも康永4年（1345）の4月23日である^(注13)。この十年間は、幕府にとって平和的手段による国内秩序の再建の時代であった^(注14)。

仁木頼章が丹波国八田郷に八幡神社を造営したのは、まさにこの十年間の中に入る。ではその意図は何であったろう。それを示唆する二つの事実がある。

ひとつは室町時代の八田郷が仁木氏の所領であったことである。応永6年（1399）5月3日付けの「將軍家足利義満安堵下文」に、丹波国八田郷は仁木兵部少輔義員のものであるが、その内本郷については、上相安房守憲定に宛がうと明記されている^(注15)。限られた史料に拠る限り当時の八田郷には、本郷・高槻保・上村・下村などがあり、当時上村（現在の綾部市上八田町と七百石町）は幕府領・安国寺領・岩王寺領・上杉領などが入り乱れており、高槻保（高槻町）も同様であったらしい。上に見たように本郷（上杉町周辺）は上杉氏の本貫地で上杉領と認められたのであろう^(注16)。しかし、先に見た倉持文書の足利領「八田郷」全体が丹波守義員に伝領されたのである。さらに『何事記録』には延徳2年（1490）に至っても伊勢仁木氏が丹波国矢田・上林を保持していると書かれている^(注17)。

では、八田郷はいつから仁木氏の所領になったか。仁木氏は尊氏・頼章の死後、義長の乱などもあり、衰退の一途をたどった。したがって鎌倉時代末期に足利領であった八田郷

が仁木氏に与えられたのが尊氏・頼章の時代であったことはほぼ間違いなからう。その具体的な時期を示唆するのがもうひとつの事実で、それは康永元年（1342）12月23日に足利尊氏・直義兄弟の母上杉清子が亡くなったことである。^(註18)文永7年生まれで、73歳であった。これは実に、康永2年6月11日の淵垣八幡神社の建立の半年前にあたる。『太平記』には太平であったこの時期の記事が少なく、ほかの資料でも、尊氏が頼章を連れて埋葬あるいは供養のため母の故郷に帰ったなどということは記録されていない。しかし尊氏の帰郷に関係なく、八田郷が仁木氏の所領になった時期は仁木氏全盛のこの時期以外に考えられないのである。尊氏は八田郷を仁木氏に与え、母と自分の故郷をこうして最も信頼できる仁木頼章に託したのではないであろうか。

6. 新しい村とその後の仁木氏

八田郷をあたえられた仁木頼章は早速、源氏の氏神の八幡神社を建立した。場所は10年前に大槻備中守によって立てられた下村の妙徳寺の北東隣である。この寺と社を中心に、上杉領本郷に対抗して人もこの地に集めたであろう。仁木氏の家人、高城の大槻備中守の関係者などがこの新しい村の住人になったと考えられる。

八田郷は、近代の西八田村と東八田村にあたるが、旧東八田村には上杉氏の本貫地上杉荘（本郷）があり、旧西八田村の北部の現上八田町や七百石町（上村）には飛び地のような状態で岩王寺や安国寺に寄進された荘園が散らばっていた。観応の擾乱（1350年）までは、まだ10年近くあったが、暦応3年（1340）直義主導の幕府が尊氏派の佐々木道誉父子を配流したり、康永元年（1342）尊氏派の土岐頼遠を直義が処刑するなど、既に尊氏・高氏と直義・上杉氏の対立は始まっていた。尊氏の弟直義派の上杉氏が上杉・梅迫町あたりに勢力を張っている以上、仁木氏としては西八田南部の下村（現在の岡安町・淵垣町・下八田町）を地盤とせざるを得なかった。高城城主大槻備中守が創建した妙徳寺とそれに隣接する八幡神社はまさに下村の真ん中の淵垣町に位置している。八田の西半部を抑えることは、直義派の上杉氏に対する尊氏・高師直側の対抗策の一つでもあった。この新しい村の誕生は、このように中央の歴史に直結していた。

仁木頼章は、8年間幕府の執事の職を務めた。先述のように1358年に尊氏が亡くなると出家し、翌延文四年10月13日に没した。その後八田荘は、先に見たとおり、本郷以外には仁木氏の所領という応永6年（1399）の史料がある。義員（応永3年から6年まで丹波守護）の後は伊勢仁木氏に伝領された。約90年後の延徳二年（1490）に至っても伊勢仁木氏が丹波国矢田・上林を保持しているという記録がある。その10年後の明応8年（1499）9月21日に丹波奥三郡（氷上・天田・何鹿）の在地勢力が仁木氏を担いで蜂起したとい

う出来事（1489～92年の丹波国一揆の予震か）があるが、蜂起の盟主に祭り上げられる程度には名族と見られていたと推察できる。^(注19)

しかし、同族の細川氏と反比例するように、その後も丹波の仁木一族は衰退する一方で、永禄3年（1560）の桶狭間の戦いの数年後、仁木左京太夫長政を最後に丹波を捨て、一族を挙げて四国の吉野川上流に移住した。^(注20) 現在丹波地方に仁木姓は殆どないが、徳島県では少なくないという。^(注21)

（こやま・まさと＝当センター元職員）

- 注1 「淵垣八幡神社と中世の神社建築」（『綾部市史』上巻、第6章第4節、綾部市）1986、248～253頁
- 注2 総合資料館「四百年前社寺建物取調書」（京都府立総合資料館、ホームページ）
- 注3 『京都の文化財』第4集（京都府教育委員会）1986、17頁
- 注4 以下の通史的な記述は、主に以下の書に拠った。
山下宏明校注『太平記』一～五（新潮日本古典集成、新潮社）1977～1988
高柳光壽『足利尊氏』（春秋社、1955、新装1987）
佐藤進一『南北朝の動乱』（日本の歴史9、中央公論社）1965
佐藤和彦『太平記の世界』（吉川弘文館、2015）1990年原本刊
森茂暁『太平記の群像』（角川選書221、角川書店）1991
森茂暁『南北朝の動乱』（戦争の日本史8、吉川弘文館）1991
- 注5 『南北朝時代の丹波・亀岡』（亀岡市文化資料館）1993、3頁。なお、本稿第3図は注8文献、10頁の図1の引用である。
- 注6 山下潔巳「綾部地方の仏教の伝播について一寺伝から一（その二）」（『綾部史談』第112号、綾部史談会、1982.8）2頁。
- 注7 『南北朝時代の丹波・丹後』（京都府立丹後郷土資料館）1978、20頁（38）。
- 注8 黒川孝宏「南北朝の動乱と足利尊氏」（『新修亀岡市史』本文編第2巻第1章第1節、京都府亀岡市）2004。なお、本稿の丹波関係の記述の多くはこの文献に負っている。
- 注9 『足利氏の歴史』（栃木県立博物館）1985、67頁（41）。入間田宣夫「尊氏を支えた人々」（峰岸純夫・江田郁夫編『足利尊氏再発見』吉川弘文館）2011によれば、この倉持文書「御領奉行番文」は父貞氏が青年高氏に譲った財産目録であるという（127～132頁）。130頁の図30では八田郷（丹波）の位置は誤りで、宮津荘（丹後）の位置と入れ替わっている。
- 注10 清水克之「足利尊氏の家族」（桜井彦・樋口州男・錦昭江編『足利尊氏のすべて』、新人物往来社）2008、125～142頁。なお、弟の直義も通説と異なり、2歳年下の1307年生まれという。
- 注11 清水克之『足利尊氏と関東』（吉川弘文館）2013、22～23頁。
- 注12 森茂暁『足利直義』（角川選書554、角川学芸出版）2015、第二章。
- 注13 米倉迪夫『源頼朝像 沈黙の肖像画』（平凡社ライブラリー-577、平凡社）2006。初版は1995年3月。黒田日出男『国宝神護寺三像とは何か』（角川選書509、角川学芸出版）2012は、

米倉氏の説をさらに補強した説得力のある著であるが、当初の両像のうち尊氏像(伝平重盛像)は、6年後の観応2年2月17日の打出浜の合戦に勝利した直義が、尊氏の子義詮との二頭政治を始めるにあたり、義詮像(伝藤原光能像)に取り替えられたとする。

森茂暁氏の近著『足利直義』(注12)の第7章「神護寺の足利直義像」は、新説支持の立場から評価し、さらに新たな傍証を提出している。

注14 佐藤進一『南北朝の動乱』(日本の歴史9、中央公論社)1965、238頁。

注15 土橋誠「歴史的環境」(森島康雄ほか『平山城跡・平山東城跡』(京都府遺跡調査報告書第14冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1990、9頁

注16 注1文献、155頁以下。

注17 『新修亀岡市史』資料編第1巻、京都府亀岡市)2000、890頁では、「矢田[桑田郡]」としているが、以前からの経過からして何鹿郡の八田と見るべきで、後出の丹波奥三郡の蜂起も考え合わせたい。

注18 注10文献、128頁。

注19 注17文献、985頁。

注20 篠山市ホームページ(<http://www.city.sasayama.hyogo.jp>)の「福住仁木城跡」の記事などによる。

注21 電話帳調査による名字分布のブログ「同姓同名探しと名前ランキング」(<http://namaeranking.com>)によると丹波の福知山市と篠山市の各2人に対し、吉野川上流の旧三好郡は8人、旧美馬郡は12人。兵庫県と京都府を合わせて124人に対し、徳島県では2倍以上の297人という。この数字は伝承を裏付けているようである。